その一

歌舞伎

62年ぶりに生まれ変わった歌舞伎座。「観覧はちょっと敷居が高い」と思っている方も多いのではないでしょうか。そんなことはありません。日本の伝統芸能である歌舞伎の素晴らしさを覗いてみませんか。

歌舞伎とはどんなお芝居？

歌舞伎と聞いて思い浮かべるのは、人気役者はもちろん、花道のある舞台に隈取（くまどり）や見得（みえ）を切る役者の姿など人それぞれでしょう。では歌舞伎という芝居はどんな芝居のことを指すのでしょう。

歌舞伎はおよそ400年前から続く演劇・舞踊・音楽が融合した総合芸術です。「歌舞伎」という芸能名は「傾（かぶ）く」という言葉が語源です。安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、奇抜な服装や髪型で世間の秩序に反して行動する人々が現れ、彼らを「かぶき者」と呼びましたが、その「かぶき者」の扮装を舞台上でまねたことから、「かぶき」と呼ばれるようになったのです。

非常に長い歴史のある歌舞伎。その作品数は約400本に上るともいわれ、時代ごとに流行した芸能のほか、舞踊作品、落語、講談や小説などを取り入れた作品が数多く存在します。バラエティーに富む作品群は、大きく「時代物（じだいもの）」と「世話物（せわもの）」の2種類に分けることができます。時代物は合戦を描いた物語や各地に伝わる伝説などを題材にした話で、世話物は江戸時代の町人の暮らしの中で、当時起こった殺人、心中、強盗などの事件を元に作られた話です。

歌舞伎を動かす人びと

歌舞伎は多くの人びとによって成り立っています。役者はもちろん、かつらを役者に会わせて結い上げる「床山（とこやま）」、柝（き）を鳴らす「附打（つけ

歌舞伎から生まれたコトバ

十八番（おはこ）

「得意としていること」を意味する「十八番」は、もともと歴代の市川團十郎が得意にしていた演目のうち18作品を、7代目團十郎が「歌舞伎十八番」として1832年に発表したものです。〝おはこ〟と呼ぶのは、台本が箱に入れられ大切に保管されていたためという説と、書画や茶器が本物であることを鑑定家が認めた署名を「箱書き」というためという説があります。

二枚目

「美男子」を指す言葉です。昔の歌舞伎の興行では一枚目の看板に人気・実力ある若手役者、二枚目に人気スターを掲げる場合が多かったためです。ちなみに三枚目は道化役が多かったようです。また、上方歌舞伎の看板の掲げ方がその由来という説もあります。

見得を切る

現代では「よい所を見せようとして無理をする」といった意味で使われますが、歌舞伎では物語の重要な場面や感情の高まりなどを表現するために、演技の途中で大きく首を振ったり、手を広げ、目を大きく見開いたりなどのポーズをつくって一瞬静止します。これが「見得」で、舞台全体が一枚の絵のように見えます。

うち）」、定式幕（じょうしきまく）を開け閉めする「幕引き」、音楽を演奏する人、舞台を作る人などさまざまです。

中でも役者は、テレビや映画に出演することも多いので最も身近に感じる存在です。この役者を呼ぶときに、その役者の名前ではなく「○○屋！」などと呼ばれているのを聞いた人も多いはず。これは「屋号」と呼ばれ、先ごろ亡くなった市川團十郎さんは「成田屋」と呼ばれていました。屋号とは大昔その役者が商っていた店などの店名が由来ですが、後に自身が奉公していた商店の屋号や、信奉する社寺や出身地など多岐にわたり、現在では由来そのものが分からなくなってしまったものもあるようです。

歌舞伎の舞台にはさまざまな身分や職業を演じる役者がたくさん出演していますが、そこに女性の役者は存在しません。これは江戸時代、風紀を乱すという理由から幕府が女の歌舞伎を禁止したためです。そのため男性役者が女性を演じる、「女形」（おんながた。女方とも）という役回りが生まれたといわれています。

いろいろな役者が舞台を勤めるなか、それぞれの役者が先祖や父兄、師匠など先人の名を継ぐことを「襲名」といいます。これは歌舞伎に限らず、歴史のある商家、落語や相撲などさまざまな世界で行われています。襲名は単に名前が変わるだけでなく、その名前にふさわしい芸風や芸格を身に付けるべく精進・努力を要します。襲名披露では、一座の俳優が並んでお祝いの言葉を述べます。これを「口上」と言います。テレビなどでご覧になった人も多いのではないでしょうか。

さあ歌舞伎を楽しもう

歌舞伎にはたくさんの演目があることは先に述べた通りです。では初めて見るときには、どの演目を選べばよいのでしょう。一般的に人気のある代表的な演目として挙げられるのが「三大演目」と「勧進帳」です。三大演目とは「菅原伝授手習鏡」（すがわらでんじゅてならいかがみ）、「義経千本桜」（よしつねせんぼんざくら）、「仮名手本忠臣蔵」（かなでほんちゅうしんぐら）のことです。これ以外にも「白浪五人男」（しらなみごにんおとこ）や「助六由縁江戸桜」（すけろくゆかりのえどざくら）など、誰しも一度は聞いたことがある名セリフが楽しめる演目があります。いずれもストーリーが比較的分かりやすく、見どころが盛りだくさんの内容です。

さて演目も決まり、歌舞伎を見に出かけるとします。でも歌舞伎座は東京・東銀座（旧木挽（こびき）町）にしかありません。ほかにはどこで上演されているのでしょう。歌舞伎座が改修工事をしている間にも利用されていた新橋演舞場や国立劇場、大阪松竹座、京都四條南座など主な劇場以外でも、各地域の劇場や市民ホールで巡業というかたちで公演されています。

チケットはそれぞれの劇場やチケットセンターで入手することができますが、歌舞伎座には独特の「幕見（まくみ）」という楽しみ方があることをご存知でしょうか。通常の公演は、いくつかの演目が組み合わさっていますが、幕見とは、そのうち好きな幕だけを4階の自由席から楽しむ歌舞伎の鑑賞方法です。4月の柿葺落（こけらおとし）公演の場合、最も高額な席が2万2000円、安い席で4000円のところ、2000円という手ごろな金額で鑑賞できます（幕見の料金は、演目ごとに変動）。ただしチケットは当日のみの販売で、椅子席・立見席を合わせて156席のため、人気演目の場合は売り出し時間のかなり前から並ばなくてはなりません。詳しい購入方法は、HPなどで調べてください。

参考資料：「歌舞伎の愉しみ方」岩波書店、「歌舞伎座」http://www.kabuki-za.co.jp/、「歌舞伎美人」http://www.kabuki-bito.jp/（松竹HP）、「歌舞伎」http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/kabuki/jp/index.html（日本芸術文化振興会HP）など